

教員免許ポートフォリオの改善による教師教育の再構築

研究代表者 間瀬 茂夫 (国語文化教育学講座)
研究分担者 竹下 俊治 (自然システム教育学講座)
山崎 敬人 (初等カリキュラム開発講座)
藤中 透 (技術・情報教育学講座)
草原 和博 (社会認識教育学講座)
森田 愛子 (心理学講座)
吉田 成章 (教育学講座)
米沢 崇 (学習開発学講座)

I 研究の背景と目的

1. 背景と目的

広島大学における「教職実践演習」は、平成 25 年度の実施から 3 年度が経過し、平成 28 年度で 4 回目の実施となった。一方「教員免許ポートフォリオ」は、平成 23 年度のシステムの本格運用開始から 6 年度が経過している。昨年度のプロジェクトでは、これらの教員養成カリキュラムと方法の教育的効果を分析し検証するとともに、具体的な改善の方向性を示した。本年度の本プロジェクトの目的は、そこで示した改善点を実行に移すとともに、さらなる改善の方法や方向を探究することである。

2. 研究計画

前項の研究目的を達成するために、次のような研究の実施計画を立てた。

- 1) 平成 27 年度に見直しを行った本学「教職実践演習」の改善点の具体的な授業方法を検討し、実行するとともに効果を検証する。
- 2) 今後の教員免許ポートフォリオおよび「教職実践演習」のさらなる改善に向け、他大学、特に総合大学、研究大学における先進的な教職課程の実施状況を視察・調査し、本学との比較検討を行う。
- 3) 教員免許ポートフォリオ・システムの改善について検討を行う。

(間瀬茂夫*)

II 「抽出ポートフォリオ」による「教職実践演習」の改善

1. 「教職実践演習」改善の方向性

昨年度の共同研究プロジェクト「広島大学教育学部における教員免許ポートフォリオと「教職実践演習」の教育的効果の検証と改善」において、本学の教員免許ポートフォリオの今後のあり方について、次の点に改善の方向性をまとめた。

- ①教員免許ポートフォリオの「実質化」
- ②ポートフォリオの実物化
- ③抽出ポートフォリオの作成

- ④授業における教員免許ポートフォリオの教授
- ⑤カリキュラムにおける抽出ポートフォリオの活用
- ⑥ウェブ・システムの改修1＝ウェブ・システムの簡素化
- ⑦ウェブ・システムの改修2＝ふりかえりの電子化

今年度は、特に①から⑤に取り組むことにし、それにともなって、「教職実践演習」の内容についても、授業計画を中心にいくつかの改善を行った。ここでは、その結果および成果について報告する。

2. 平成28年度における「教職実践演習」改善の実際

(1) 授業計画

今年度の「教職実践演習」の授業計画については、昨年度の共同研究プロジェクトおよび教員免許ポートフォリオ実行委員会における検討結果にしたがい、シラバスに次のように記した。国語科の例を示す。

- 第1回 オリエンテーション（授業計画）と抽出ポートフォリオの作成（1）抽出ポートフォリオとは
- 第2回 規準5（生徒指導）又は規準6（学級経営）に関するリフレクション（クラス単位でローテーション）
- 第3回 規準7（教育法規・服務）および規準8（教師としてのあり方）に関するリフレクション（クラス単位でローテーション）
- 第4回 規準5（生徒指導）と規準6（学級経営）に関するフォローアップ
- 第5回 規準7（教育法規・服務）に関するフォローアップ
- 第6回 教科別授業のオリエンテーションおよび抽出ポートフォリオの作成（2）「教育観（ティーチング・フィロソフィー）」の素案
- 第7回 規準1～4のふりかえり
- 第8回 教材の再分析1
- 第9回 教材の再分析2
- 第10回 授業実践例1
- 第11回 授業実践例2
- 第12回 指導案の改善1
- 第13回 指導案の改善2
- 第14回 規準8（教師としてのあり方）に関するフォローアップおよび抽出ポートフォリオの作成（3）「教育観」の下書き
- 第15回 規準8（教師としてのあり方）に関するフォローアップおよび抽出ポートフォリオの作成（4）「教育観」および抽出ポートフォリオの完成

大きな変更点は、次の三点である。一点目は、第1回のオリエンテーションを教科別ではなく、全体のものとし、4年間の教職に関する学習のまとめとして、また半期の授業の成果として、「抽出ポートフォリオ」および「教育観（ティーチング・フィロソフィー）」を作成することを目標として設定したことである。「教職実践演習」の学習を規準別のものとしてだけではなく、教師としての自己のあり方の全体として総括することを意図した。

二点目は、規準5から規準7のリフレクションとフォローアップを5回から4回にし、第6回に教科別のオリエンテーションを設定したことである。第6回は、単に次回以降の教科ごとの学習の説明とするのではなく、規準8のリフレクションとして「教育観」の素案を考えさせる機会とした。

三点目は、第14・15回において、「教育観」および「抽出ポートフォリオ」を作成させ、完成させる学習機会を設定したことである。モノとして提出することを課すだけでなく、「教育観」および「抽出ポートフォリオ」について、教師としての自己のあり方を他者に向けて客観的に説明し、証明するものとして位置づけることを明確にした。

(2)「抽出ポートフォリオ」の設定および教員免許ポートフォリオの再定義

「抽出ポートフォリオ」を導入し、上記の授業計画を実施するに当たっては、教員免許ポートフォリオの再定義を行った。

e ポートフォリオ…広大教員養成スタンダード8規準に対応してアップロードされた課題の履歴。部局・講座を越えて全教員が参照可能だが、まとまりを欠く
実物ポートフォリオ…教員免許取得に関わる学生自身の学びの履歴のすべてを納めたもの。「教育実習録」や講義・演習、自主的な活動などすべてが対象。大学時代の学びの履歴すべてを納めるが、量が多くまとまりも欠く。

抽出ポートフォリオ…8規準に照らして必要な評価材のみを抽出して作成されたもの。学生の教育観を表現した「教育観（ティーチング・フィロソフィー）」および評価材の目録である「学びの履歴」があることで、ポートフォリオとしてのまとまりがあるが、作成に手間と時間がかかる。

また、オリエンテーションにおいては、次のような学年の整理を行った。

学習ポートフォリオ…学習の成果を収めたもの。レポート、指導案、実習録、提出課題などを収める。

教授ポートフォリオ（ティーチングポートフォリオ）…教師が教育・授業の成果を収めたもの。シラバスや「教育観」、生徒の学習成果などを収める。

アカデミック・ポートフォリオ…研究と教育にかかわる成果を収めたもの。「教授ポートフォリオ」に収められるものだけではなく、研究業績やその成果物なども収める。

その上で、「教職実践演習」において、教員免許ポートフォリオ（eポートフォリオ）に基づいて「抽出ポートフォリオ」を作成することの意味と目標を次のように設定した。

教職実践演習では「学習ポートフォリオ」から「教授ポートフォリオ」への転換を目指していく。

「抽出ポートフォリオ」の具体的な構成は、広島大学教員養成スタンダード8規準をふまえ、次のようなものとした。

○表紙：タイトルは「教職ポートフォリオ」とする。教科、所属、学籍番号、氏名を記す。

○1ページ目：「教育観（ティーチング・フィロソフィー）」と「学びの履歴」を記す。

○スレッド1：規準1～4に関わる必要な「評価材」を選択しておさめる。

○スレッド2：規準5～7に関わる必要な「評価材」を選択しておさめる。

○スレッド3：その他、自分自身の教師としての学びにおいて重要な履歴をおさめる。

「ティーチング・フィロソフィー (teaching philosophy)」は、広大スタンダードの規準 8「教職への使命感，教育的愛情，対人関係能力など教師としての資質や能力を概ね備えている。」に対応したもので，教職課程の学びの全体を教師としての自分の自己像や価値観，授業観に引き付けて言語化したものである。具体的なタイトルは，以下の例を参考に自分で選択させることとした。

例)「教師となるための抱負」「教師としての心構え」「自分自身の教育観・授業観」

ただし，ここでの「教育観」は，教職実践演習終了時の自分自身の暫定的な「教育哲学」であり，教職生活全体を通じて，変更・修正されていくものと位置づけている。

「学びの履歴」は，評価者（他者）に対する「教育観」の「エビデンス」である。「評価材」は，以下の例を参考に自分で選択させた。

講義・演習等で作成したレポート等 指導案 実習等での授業記録・教材等

指導教員からのコメント等 教職実践演習で作成したまとめシート等

教員免許取得に関わる正規の活動以外の学びの履歴等（例えば，アルバイト，課外活動等）

「学びの履歴」は，評価材を収録するだけではアピールに欠けるので，その「目録」を作成・記述させ，「教育観」と「評価材の目録」とその意味づけの三点を絡めて記述されるようにした。

3. 「抽出ポートフォリオ」における「教育観」の実際

(1) 4年次の「教育観」の実際

では，本年度の「教職実践演習」を通して，学生の記した「教育観」はどのようなものであったか。本学の特に中学校・高等学校の教職課程では，次のような類型が考えられる。

- A 教科の授業観を基軸にしたもの
- B 教科内容を基軸にしたもの
- C 教師と学習者との関わりを基軸にしたもの
- D 学校や教育のあり方を基軸にしたもの

ここでは，国語科のクラスにおける「教育観」の事例を見ていきたい。教育学部国語文化系コースの学生の「教育観」の冒頭を以下に引用する。

私が大学4年間を通して課題とし，おそらく一番考えたことは，他者という存在についてである。きっかけは定番教材「故郷」の読み方を考える大学の授業であったと記憶している。登場人物ひとりひとりについて小説には表れない部分まで想像し，登場人物・書き手など多角的な視点を持って読む先生の解説を聞いて，はっとさせられた。私はこれまで「私の視点」しか持っていなかったのではないか。人の背景を想像し思いやったことがあっただろうか，無意識のうちに心ない言葉を発して傷つけてきたのではないか。私と他者では生きてきた文脈が全く異なるのだということに，気付かされた。他者と自分とは全く異なる物だと言うことは当たり前なのだが，当時の私にはとても衝撃的だった。

また，私たちが他者とのコミュニケーションのために用いている「言葉」もまた，自分のものではない・・・(後略)

ここでは，文学作品の解釈や言語という教科内容に関わって「他者」の問題が問われて

いて、こうした「教育観」は、類型Bにあたると考えられる。続いて引用するのは、教育学部教育学系コースの学生の書いた「教育観」の冒頭である。

私が教師として目指すのは、生徒の自己肯定感を高める指導である。そのように考える理由は自分自身の経験にある。大学進学を考える際、いざ進路選択をするという場面で、自分の価値が分からない、自分のやりたいことが分からないということに悩み、そもそも自分自身について考えたことがあまりないということに気がついた。その経験から、生徒が自分自身について考える機会を授業の中でつくることで、自己肯定感を高める指導を目指したいと考えるようになった。

では、国語の授業の中で自己肯定感を高めるためにはどのようなことが必要なのか。・・・(後略)

この学生の「教育観」では、学習者のことがまず述べられている。類型Cに相当するであろう。三番目に、文学部の学生の「教育観」の冒頭を引用する。

現代社会において、「教育」とは、生徒たちが教育課程の修了後に、望ましい社会の一員となれるような成長を促す為、教師が子どもに対してあらゆる面から働きかける行為であると私は考える。生徒と向き合い一人一人が本来持っている能力をより良く伸ばす働きかけによって、「教育」は成立する。おそらく、今後も教育内容に目立った普遍性はあまり見られないだろう。しかしながら、どんな教育になるかは、生徒、場所そして時代によって大きく変化するものだ。では、その時代、その生徒に「教育」が効果を発揮しているかどうかを見るためにはどうしたらいいのだろうか。

私は国語科の教員志望であり、国語は社会にとって何よりもなくてはならない教科であると受け止めている。・・・(後略)

この後には、国語のことが書かれていて、一概にこの学生の「教育観」が類型Dとは言えないが、教育や学校の果たす役割や機能から、教科や教師としての自己の役割を導出するという志向がここにはうかがわれる。

これ以上の考察をここに示すことはできないが、こうした記述には、学生が「教育観」および「抽出ポートフォリオ」をまとめることを通して、自分が現在持っている教職に対する考えを自分なりの「哲学」としてまとめ、その中にこれまでの教職課程での学びの履歴を位置づけていることが見てとれる。

(間瀬茂夫*・竹下俊治・山崎敬人・藤中透・草原和博・森田愛子・吉田成章・米沢崇)

Ⅲ 他大学における取り組みの検討

1. 慶應義塾大学における教員養成—「教職課程センター」の取り組み—

(1) 訪問の目的 —昨年度の取り組みから—

本研究の目的に照らして、島根大学と福井大学の研究者を招聘して開催した昨年度の研究会企画に引き続き、本年度は広島大学と同様に「研究大学」として教員養成に取り組んでいる慶應義塾大学の教員養成の取り組みに着目した。同大学では1983年に「教職課程センター」を設立し、同センターが全学の教職科目の提供や教育実習・教職実践演習といった教員免許取得に必要な授業科目のコーディネート、さらには「教職ログブック」という電子上で教職にかかわる学生の履修履歴を蓄積するシステムの管理・運用を行ってきている。そこで2017年1月24日(火)15:00-17:00に同センターの副センター所長である佐久

間亜紀教授のもとを訪問し、同センターの取り組みをご紹介いただき、今後の研究大学における教員養成のあり方について研究交流する機会を得た。当日は、同センターの藤本和久准教授にもご臨席いただき、事前にお伺いしていた質問事項にお応えいただきながら、多くの資料提供も受けた（図1参照）。以下にご紹介いただいた取り組みの概要をまとめつつ、いただいた資料からも情報を補足しつつ、本研究の目的に照らした調査の成果を述べていきたい。



図1：「教職課程センター」訪問時の様子

（2）慶應義塾大学における教員養成の現状と「教職課程センター」の位置

福沢諭吉を建学の祖とし、1858年の蘭学塾設立から総合大学としての1920年設立以来の伝統と、村井実といった教育学者が籍も置いた文学部教育学専攻をはじめ、10学部・14研究科からなる総合研究大学が慶應義塾大学である。同大学では、文学部・理工学部・総合政策学部・環境情報学部において、中学校：国語・社会・外国語（英語・ドイツ語・フランス語・中国語）・数学・理科・社会・情報の一種免許状が、高等学校：国語・地理歴史・公民・外国語（英語・ドイツ語・フランス語・中国語）・情報・商業・数学・工業・理科の一種免許状が取得できる。この教職課程を担っているのが、「教職課程センター」である。同大学には、「自然科学研究教育センター」・「法学研究所」・「メディアセンター」・「国際センター」といった10もの研究所・センターがあり、「教職課程センター」はこのうちのひとつである（『Keio University Guide Book 2015』より）。

同大学に「教職課程センター」が1983年に設立されたのには、文学部教育学専攻のみで全学の教職課程を担うことが実質的に困難になってきたという実務的な側面が大きいとのことであった。慶應義塾大学において教職課程を履修するためには、第2学年進級時に「教職課程登録費」3万円を納入することで教職課程に登録することになる。同時に「教職ログブック」のIDも付与される。4つのキャンパス（慶應義塾大学には三田・日吉・矢上・信濃町・湘南藤沢の5つのキャンパスがあるが、教職課程のない信濃町キャンパスを除いている）それぞれにも教職課程担当の事務職員は1～2名配属されているが、教職課程全体の事務は「教職課程センター」の2名～4名の事務員が担っている。教職課程センターの専任教員は6～7名であり、訪問の時点では6名であった。

教職課程の履修を登録する学生数は概ね300名であり、第4学年の6月に実施される「教育実習」時には約100～120名程度となるという。これは1,000件を超える教員免許取得単位を提供している早稲田大学や広島大学とは、最終的に単位認定をする学生数という意味では大きく事情が異なっている（広島大学：幼稚園教諭92名、小学校教諭215名、中学校教諭363名、高等学校教諭412名、特別支援学校教諭29名一述べ1,111名・2016年3月卒業生）。その要因の一つには、教育実習を行うためには、各教科の内容の定着を確認するための「実力テスト」に合格する必要があることも挙げられる。このテストの合格率は5割を切っているとのことであった。すなわち、安易に単位を履修して教育実習にまで行き着ける仕組みとはなっていないのである。

教育実習を経た100名強の学生のうち、教職実践演習を経て教職に就く学生数は概ね30

名程度であり、その大部分は私立学校であるとのことであった。これは、そもそも入学してくる学生の多くが私立学校出身者であるということと関係している。教育実習先は基本的に学生が自ら確保することとなっており、慶應義塾系列の「一貫教育校」は「附属学校」ではないため、卒業生による母校実習以外の受け入れの敷居は高いとのことであった。出身校が統廃合で存在しない、あるいは特殊な免許を取得するような事情がある場合には、「教職課程センター」が仲介して教育実習先の確保を助けることもある。

慶應義塾大学の「教職課程センター」は、学部・研究科ではなく全学の各評議会の下に位置づく独立したセンターである。6名の専任教員の主な職務は、聞き取り調査から整理すると、次のようになるだろう。

①全学における教員養成組織の管理・運営・調整

- ・「教職課程運営委員会」（各学部長から構成）との連携
- ・「教職課程学務委員会」（各学部における教職担当教員から構成）との連携
- ・「スタッフ会議」（「教職課程センター」の教員・事務から構成）の開催

②教職科目の提供

- ・教職に関する科目の提供
- ・教育実習の運営（「教育実習事前指導」などを含む）
- ・教職科目担当の非常勤講師の確保
（これは同時に非常勤講師の人事権を同センターが有していることを意味する）
- ・教職実践演習の提供

③教職科目履修学生への指導・対応

- ・教職科目履修学生への「学習指導」（「教職オフィスアワー」の提供など）
- ・「教職ログブック」の管理・運用

④全学における教員養成の発信と卒業生ネットワークの形成

- ・「公開研究会」の実施
- ・教員免許更新講習等の実施
- ・「教職ログブック」を活用した卒業生の情報提供
- ・「三田教育会」といった卒業生ネットワークの形成と連携

慶應義塾大学における教員養成の特色や理念は、なんとといっても「開放制」にあるという。すなわち、それぞれの専門科学・ディシプリンを背景に持ちながら、留学経験や社会人経験などを経てから教職に就く卒業生も多く、卒業と同時に教職の道へというだけではない「教育」関係職への門戸を開いているところが重要だとのことであった。比喩的に言えば、各学部・学科の専攻と合わせて教職という「(副)専攻」を履修する「ダブルメジャー（複数専攻）」というコンセプトで、「教職課程センター」を中心とした教職課程を提供しているとのことであった。そのために、「教職ログブック」は卒業後も維持され、継続的に「公開研究会」などを介して卒業生ネットワークが構築され、「教職ログブック」やこのネットワークを通して様々な情報が提供されるという仕組みをとっており、卒業後に教職に関心を持った卒業生への門戸を広く開いているとのことであった。

(3) 広島大学との比較から見た慶應義塾大学における教員養成の特質

事前に質問事項として送付した質問事項の比較表を聞き取り調査と資料に基づいて作成したものが表1である。この表1に基づいて、慶應義塾大学と広島大学における教員養成

の特徴を明確にしていきたい。

表1 慶應義塾大学と広島大学における教員養成の特色の比較表

	慶應義塾大学	広島大学
① 「教員養成」についての 構想・考え方について	「開放制」 「ダブルメジャー」	「教員養成広大スタンダード」
② 教職課程の特色について	教科に関する科目：各学部 教職に関する科目： 「教職課程センター」	教科に関する科目：教育学部・他学部 教職に関する科目：教育学・心理学講座
③ 「教職課程の履修履歴」 について	「教職ログブック」	「eポートフォリオ」
④ 「教職実践演習」について	「教職課程センター」の教員による科目提供 10名程度で教室運営	取得免許種毎の教室運営 「抽出ポートフォリオ」の作成
⑤ その他	「実力テスト」の実施 「公開研究会」の実施	ボランティア活動など 卒業生組織や院生組織との関連など

「教職ログブック」の開発は、2006～2007年度の「慶應義塾大学 文部科学省教員養成 GPプロジェクト」の取り組みの一環として、「ASAHI ネット」との共同によって実施されている（慶應義塾大学教職課程センター編『慶應義塾大学 文部科学省 教員養成 GP プロジェクト報告書』2008年、参照）。広島大学の「eポートフォリオ」が「もみじ」と連動することで、学籍情報や単位履修情報との連携を強め、逆にシステムとしての運用・改修の小回りがきかないのに対して、慶應義塾大学の「教職ログブック」は学籍情報や単位履修情報とは連動していない反面、システム改修やスマホ対応といった運用の小回りが利くという特徴がある。「教職ログブック」は「教職課程履修登録」時に、慶應義塾大学のIDアカウントとは別のIDアカウントが学生に付与される。教職課程に関わるレポート課題などをストックする機能を有していることはもちろんのこと、「自己チェックシート」を活用することで、介護等体験のための病院での審査の必要性にも気がつくことができるようになってきている。さらに、教育実習時のメンター教員からのフィードバックもこの「教職ログブック」を介して返却され、「教職実践演習」受講の意思表示などもこれを介して行われる。ただし、教職課程に関わる重要な書類の多くはあくまで紙媒体であるため、教職課程に関わる履歴のすべてを収め、必要な事務手続きのすべてを担っているわけではなく、あくまで対面でのやりとりを基本としている。

他方で「教職ログブック」を同センターの教員の視点から見ると、センターの教員間の必要な情報の共有の場としても機能しているとのことであった。必要な会議や情報等の交流だけではなく、「マネジメント」タグは当該学生に対する「学習指導」（「教職オフィスアワー」の時間での個別対応など）の記録を「指導メモ」としてストックすることができる重要な電子上の指導要録として機能している。4つのキャンパスのどこで学生指導をすることになっても、この「教職ログブック」にアクセスすれば、いつ誰がどのような指導を

行っているのかの記録を確認できることは大きな利点であり、個別の学生指導の前提ともなっているという。もちろん Bb9 のような学習支援ツールもあるが、「教職実践演習」といった教職科目に関わる掲示板や、公開範囲を指定できるレポート公開機能もある。自分のレポートを他の学生にも閲覧してもらったり、自分たちで「マイコミュニティ」を構築して web 上でやりとりすることは(近年では他の SNS ツールを利用することが多いとのことであったが)、多学部・多専攻からなる教職課程履修学生の集団にとっては重要な学びの契機になるとのことであった。

この「教職ログブック」は GP の取り組みの一環で「ASAHI ネット」と共同開発しているため、開発後のランニングコストは実質負担する必要がなく、少なくとも年に一度は改修についての問い合わせと打ち合わせを行っており、「共同開発者」であるとともに「第一モニター」としてこのシステムを運用することができている点も、このシステムの使い勝手の良さに利していると思われる。この「教職ログブック」は「教職実践演習」履修者(毎年約 100 名強)のアカウントは卒業後も維持され、「公開研究会」の開催案内や各種情報提供のためのハブとして機能している点も重要である。

「教職実践演習」は、「教育実習事前指導」と同じように 10 名程度の少人数で、「教職課程センター」の専任教員のみで教室運営がされている。かつての「総合演習」を前身としながら、各教員によって提供されている「教職実践演習」は、例えば 2016 年度では「教師に向き合える教師になるために」(佐久間亜紀)、「教育実践を読み解く」(藤本和久)などが開講されている(慶應義塾大学編『平成 28 年度教職勝ち得センター講義要項』参照)。学生はこれを参照しながら第 1～4 希望までを提出し、これに基づいてセンターの教員が教室構成の調整を行う。10 名という少人数規模での運営と、非常勤講師には依存しないという点に、「教職課程センター」が最終的な全学における教員養成の責務を担っている側面を垣間見ることができた。ただし、各科目につき 1～2 名のゲストティーチャーを呼ぶ予算は確保されているため、ほとんどの「教職実践演習」ではゲストティーチャーによる授業あるいはフィールドワーク等が実施されているとのことであった。

(吉田成章*・間瀬茂夫・草原和博)

2. 慶應義塾大学における教員養成の取り組みから見た広島大学の課題

「研究大学」における教員養成という文脈は共有していながら、慶應義塾大学には教育学部が設置されていないため、大学における教育学部の置かれた位置と役割という課題意識は共有することはできない。しかしながらそれでも、慶應義塾大学での取り組みは次の点で、広島大学における教師教育の取り組みに対して示唆的であると思われる。

第一に、教職課程を提供することでどのような教育学的意義を発信していくか、という点である。慶應義塾大学は「学部の自治」を前提とした「開放制」のもとで教員養成を提供しており、実際の就職状況に鑑みても、高等師範学校・師範学校の系譜を持つ広島大学とは大きく文脈が異なっている。だからこそ慶應義塾大学では、卒業後すぐに教職に就くわけではない学生が教職課程を履修することに大きな意味を見いだしている。「教育」とは何かを学んでもらうことで、教職以外の進路選択をとったとしても広く間接的に教育学(研究)の意義を社会に発信していくことに意味があると捉えているのである。したがって、それぞれの学部で専攻する学問に傾倒する学生から見た「教育」・「教職課程」の意義や魅

力の捉え直しが重要となる。このことは広島大学の文脈で言えば、「広大教員養成スタンダード」にどのような教師教育の理念や教職課程を主として提供する教育学部・教育学研究科の社会的意義をどのように発信していくかに関わっている。特に、「広大教員養成スタンダード」が全体としてどのような教師像を描いているのか、また学生がどのような教員になろうとしているのかという視点から、その意味を検証する時期にきているのではないだろうか。

第二に、学部間の学生同士の交流をどのように積極的に意味づけるか、という点である。慶應義塾大学には教育学部は存在しないため、「教育学部と他学部」という構図にはそもそもなりえない。そのため、それぞれの専門を有する各学部の学生同士が教職課程の履修に伴って生起する交流は、主専攻の学修と並行して重要視されることになる。それを媒介するものが「教職ログブック」であった。広島大学では、「eポートフォリオ」の運用は教師と学生間に限定されており、学生同士の交流は運用上想定されていない。他方で、それぞれの講義・演習・実習では、各学部の学生同士の交流は特に中学校・高等学校の国語・社会（地理歴史・公民）・数学・理科・外国語・情報などでは実際には活発になされている。しかしながら、初等・中等間の教職科目の交流や、教職に関する科目における教科種を越えた交流などは限定的である。慶應義塾大学とは異なってほぼすべての免許種を網羅している広島大学では、それぞれの免許種間を横断した学生の交流の意義という視点から、教師教育・教員養成の取り組みの意義を見直していく必要もあるのではないだろうか。

最後に第三に、卒業生ネットワークのもつ意義を学術的にも教育的にもどのように意味づけていくか、という点である。慶應義塾大学の卒業生ネットワークの構築はまだ歴史は浅く、教職への就職率という意味でも広島大学ほど体系的ではない。それでも、教員免許更新講習や「公開研究会」の実施および「教職ログブック」と連動する形で、「顔」が見えてお互いに声を掛けられる距離感で卒業生ネットワークが構築されてきているといえる。他方で広島大学では、各教科・専攻・ゼミ単位での卒業生ネットワークが体系的かつ継続的に構築されてきているという強みがある。広島大学の卒業生ネットワークのもつ意味を学術的な側面からも検証していくとともに、他大学や他専攻の卒業生ネットワークを組織するハブとしての役割を構想していくことも必要であるかもしれない。

(吉田成章*・間瀬茂夫・草原和博)

IV 研究の成果と今後の課題

- ①「教職実践演習」において、「抽出ポートフォリオ」および「教育観」を作成させることで、8つの規準ごとに分断されがちな教師としての資質・能力について、学生自身が統合的にとらえることができた。「教職実践演習」という授業の学習目標も明確になった。
- ②教職課程の履修を通して、学生がどのように成長し、最終的に教育観や教師観を形成するのかということについて、大学教員側がとらえられる手がかりとなった。
- ③慶應義塾大学教職課程センターの取り組みや重視している教育内容から、改めて広島大学の特徴や課題と、今後の教師教育のあり方を検討する観点が得ることができた。
- ④教員免許ポートフォリオ・システムの検討は継続的な検討課題となったが、次期システムに求める機能における優先事項が明確になった。現行システムの改修も行った。

(間瀬茂夫*・竹下俊治)